共同売店の現在

細越　まみ

１．はじめに

沖縄本島の北部、山原（ヤンバル）と呼ばれるところには、「共同売店」もしくは「共同店」と呼ばれる店が点在する。共同売店は集落単位で置かれ、今は存在しない集落も多い。集落とは、市町村を細分化する区画であり、他に村落、部落、字などとも呼ばれる。共同売店は、普通の商店のように、個人の利益を目的として作られたものではない。集落の、集落による、集落のための共同売店である。現在、共同売店は、大型店舗などの影響で客足が減り、厳しい経営状況にあるところも少なくない。しかし、それにも関わらず、なんとかして共同売店を存続させたいと願う集落がほとんどである。

共同売店には、共同売店独自のシステムというものが存在し、そのシステムは今も尚、多くの共同売店で残っている。「購買活動」は言うまでもないのだが、そのシステムの中で特徴的なもののひとつが、「掛売り」である。掛売りとは、即金ではなく、あとで代金を受け取る約束をして、品物を売ることである。今回は、主に掛売りについての調査を行った。本稿では、３つの共同売店の事例を挙げながら、共同売店の果たす役割、また、スーパーなどの大型店舗が主流の現在、共同店が存続する意味を明らかにしていく。

２．先行研究

共同売店の機能については、公民館と比較しながら、「（公民館は）村落の共同という積極的な機能を果たしているとは必ずしもいえないであろう。それに引き替え、区の財政に直接寄与している共同店の機能は、非合理的な住民の感情のレベルではむしろ積極的に評価されよう」と述べられ、また、その存在意義については、「部落の象徴としての存在意義」というのが、「他集落だけに儲からせてはいけないという部落意識」と関連させながら、強調されている（安仁屋・玉城・堂前 1979）。

堂前（1997）は、共同店の主な機能として、「経済的機能」「福祉的機能」「情報的機能」の３つをあげている。経済的機能は最も重要な機能で、購買活動に加えて、かつては農林産物の生産・加工・販売も盛んに行われていたが、現在では奥共同店および津波共同店製茶販売などを除いて、これらの購買活動は見られない。共同店によっては、利益配当や字の諸団体に対する物品・金銭の援助も行っている。福祉的機能としては電話の取次ぎ、共同バスの運行、さらに育英資金や香典料・病気見舞いなどの支給である。情報的機能としては、共同店が日常的な情報交換の場になっているほか、マイクによる広報活動も行っているという。

さらに、堂前（1997）は、消滅したり、字の直営から個人の請負に移行した共同店について、その要因を内的要因と外的要因の２つに分けている。内的要因としては、共同店運営の理事会組織、共同店従業員の人事、共同店の財政力を、外的要因としては、都市化に伴う個人店の進出、交通体系の変化、住民の生活様式と意識の変化などをあげている。

また、宮城（2003）は、経営が困難であるにも関わらず、細々と経営している共同売店の共通点は、「お年寄りのためにやっている」という事であると述べている。つまり、「高齢化が進んだ村落を維持していくためには、共同売店というものが非常に重要であるという共通認識がある」のだという。

３．共同売店について

（１）共同売店形成の道のり

共同売店の一号店は、1906 年に国頭村の奥という集落にできた、奥共同店である。まず、この奥共同店ができた 1906 年の国頭村の様子について説明する。国頭村は沖縄本島最北端の村で、奥集落は、その中でも北に位置している。山原（沖縄県北部）には、国頭山地が島に沿って走っており、しかも、その山は海岸まで迫っていることが多い。そのため、山原の集落の多くは、国頭山地から流れる川の河口付近にある、わずかな平地に点在している。このように、奥を含め、山原の集落は、山に阻まれた、陸路が大変不便なところにあった。そのため、経済の中心地である那覇との物資の交流は、もっぱら「山原船」と呼ばれる交易船に頼っていた。山原船の主な役割は、那覇などの南部地域で日用雑貨等を購入し、山原地域に運び、山原地域の生産物を南部地域に送ることである。このようにして、中心都市がある南部地域と、山に阻まれた山原地域との間での物資の運搬は行われていたのだ。

奥共同店の誕生については諸説あるのだが、堂前（1997）は「奥集落には当時マチヤ（町屋）と呼ばれる小さな雑貨商を営む者が２人おり、１人は代々奥に定住している糸満盛邦であり、他は外来者であった。小さな貧しい村落で２つのマチヤの競合は、村落共同体の破壊をも意味していた。結局、糸満盛邦が自分のマチヤを字に譲渡して、共同店を設立することによって外来者を追放し、村落共同体の秩序を防衛したといわれる」と述べている。また、金城（2003）は、「糸満盛邦はもともとの土着の人ではなく、外から来た人である」としながらも、「与那原出身の商人と拮抗関係にあったため、糸満盛邦は自分の商店の財産をみな部落に寄付して共同店をつくった」とし、堂前の説と似通っているところがある。さらに、奥共同店創立 80 周年の記念碑には、「糸満盛邦翁は安政元年に生まれ、昭和 14 年 84 歳で没した。同氏は公共心に厚く、生前自ら営んでいた店の利益が大なることを認め、それを何とか字民共同の事業とすべく、時の有志と諮り字民の多大の賛同を得て同氏の雑貨店を引継ぎ、明治 39 年春、奥共同店として産声をあげた。そして同氏は自ら同店の監督として、その基礎づくりと発展に尽くされた。共同店創立 80 周年記念にあたり、その功績を讃えこの碑を建立す

る」とある。

（２）共同売店の経営方法

共同売店には現在、２つの経営方法がある。

１つは、集落民から集めた、ある一定の資本金によって経営する、集落直営型経営である。この場合、選挙によって集落から主任を選出し、従業員は集落から選ばれた者が交代で勤務するため、集落と共同売店が不離一体の関係にある。利益は資本金に繰り入れたり、配当金として集落民に配ったり、地域施設への補助金に当てたりしている。

２つ目は、集落が集落内の個人に経営を委託する、個人請負型経営である。集落は共同売店から家賃や水道代や光熱費を徴収するそうだが、経営が苦しく、免除される場合もあるという。集落直営型経営で赤字続きだったために、個人請負型経営になることが多いそうだが、それでも経営は厳しく、後に完璧な個人商店になることも多いそうだ（堂前 1997・宮城 2003）。

最近では、共同店を必要とし、共同売店を守っていきたいと願う人々が組合をつくり、その組合の中だけで経営しているところもあるという。そのため、全ての共同売店が、集落民全ての後押しにより経営されているというわけではないようだ。

４．都屋共同店

（１）都屋共同店の機能

都屋は、那覇市内から北にバスで一時間ほど行ったところにある、読谷村という村にある。海に面しており、漁業が盛んな集落だ。都屋共同店は、住宅の密集する中にあり、近くには都屋漁港や、幼稚園などがあった。都屋共同店を支えているのは、組合員からの資本金であり、利益は、公民館の修理などにあてているという。

写真1　都屋共同店

都屋共同店に入って、まず目に付いたのは、オバァと呼ばれる沖縄のおばあちゃん達の姿だ。レジ周辺に３人座って、話ながらもやしの髭取りをしている。聞くと、店員は３人いたうちの１人で、他の２人は客だという。「いっつも買い物のついでに、こうやって手を動かしてお手伝いしながらユンタク（お喋り）していくんだよ～」とオバァ。

写真２　もやしの髭を取る店員と客

２、３分しないうちにどんどん人が買い物にやってくる。みんな買い物のついでにユンタクしていくものだから、店内のレジ周辺は混雑する。すると、あるオバァが「ほら、オバァ、いつものやりなよ」といい、沖縄の手踊り、カチャーシーが始まる。ここに来れば、元気で楽しい、オバァたちの姿がいつでも見られるとのことであった。

写真３　カチャーシーを踊るオバァ

お昼になると、店員のオバァが、売り物のロールケーキのようなものと、ジュースを持ってきて、みんなで食べる。驚いたのは、慣れた様子でコップを持ってきて、当たり前のように食べ始める客である。これがいつもの光景のようだ。

写真４　お昼の様子

オバァ達と会話をする中で、よく出てきた言葉が「ユンタク」である。「ここに来ればみんないるから、毎日のように来てユンタクして行くんだよ」「上等なユンタクはご馳走だから、買い物がなくてもユンタクしに来る」そして、「ここはそうやってみんながユンタクして行くところだから、色んな情報がここに集まるんだよ」「ここに来れば、いついつ何処で何があるってすぐ分かるんだから」と、口々に言っていた。

これらのことから分かることは、都屋共同店には「みんなが集まり、楽しむ場所」

ゆえに「情報の集まる場所」という機能があるということである。買い物という機能を超えて、人々が集まり、ユンタクを楽しみ、そのために情報が集まるというのが、この都屋共同店なのである。

（２）掛売りの過去と現在

また、今回共同売店について研究するにあたり、私が一番興味を持った掛売りというシステムについてであるが、前述したように、掛売りとは、即金ではなく、あとで代金を受け取る約束で品物を売ることである。ほとんどの共同売店で、この掛売りが行われているという。調査していくうちに、掛売りのシステムは、昔と今で若干の違いがあることに気付いた。そのため、まず、昔のシステムについて説明してから現在のシステムについて述べたいと思う。昔というのは、都屋共同店が出来た戦後２、３年（1947～1948 年）から 1970 年代まで、そして現在のシステムへと変わり始めたのは、交通網が整備され、共同売店の有り様が変わり始めた 1980-90 年代からとする。どちらも都屋共同店店員からの聞き取り調査による。

都屋地区では、戦後ほとんどの人が漁業で生計を立てていたが、漁業は収入が少なく、安定しなかったために、貧しい住民は、掛けで物を買っていたそうだ。もちろん、掛けをするのは全額で、その支払いは給料日や大漁の日で、ほぼ１ヵ月後だったという。このように、掛買いをする人、また、掛買いをする商品の量が多かったために、記録をする掛売り帳は１人に一冊、個人専用のノートが用意されていた。

現在では、漁業のほかに副業を営んだり、会社勤めをしたりする人が増え、収入が安定し、以前ほど貧しくなくなったために、掛買いをするのは、いつも決まった小数の人である。また、掛買いをする場合は、買い物をしていて、持ち合わせが少なかったときだけであり、さらに、その足りなかった分だけを掛買いするため、昔と比べて掛買いをする商品の量も減ったという。また、支払いも、翌日に買い物に来たときに支払っていくことが多いということで、記録はチラシの裏など、いらない紙に全員分まとめて書いている。ただし、例外として、子ども会や、公民館など、個人でなく、団体のノートは専用のノートがあり、それに記録している。

写真５　現在の掛売り帳（個人）

写真６　現在の掛売り帳（団体）

３．饒平名共同売店

（１）饒平名共同売店の機能

饒平名共同売店は、名護市の北部に位置する、屋我地島にある。屋我地島には、屋我地大橋がかかっており、名護市内から饒平名共同売店まで、バスで１時間かからずに行くことが出来た。饒平名共同売店の近くには公民館があり、民家もある。また、少し離れたところに小学校があるのだが、近くに他の商店があり、学校帰りの小学生は、そちらに行くことが多いようであった。

饒平名共同売店は、集落に委託された形で経営する、個人請負型経営である。しかし、私は店員の方から話を聞くまで、個人請負型経営だとは思わなかった。それほど、買い物に来る客の様子、店内の様子は、集落直営型経営の都屋共同店に近いものがあった。

写真7　饒平名共同売店の店内の様子

ここでは、都屋共同店のように、オバァたちが集まって賑やかにしている光景は見られなかったが、レジの横にある座敷のようなところに、店員の知り合いが１人座り、話をしていた。買い物に来る客は、オバァと呼ぶにはまだ早い年代の人が多かったように思う。また、都屋のオバァたちほど長くは滞在しないが、会計をしながら世間話をしたり、店に知り合いが来て話し込んだりする様子を見て、ここでも「人々が集まり、楽しむ場所」という機能が果たされているように感じた。実際に話を聞くと、「ここは公民館が近いし、十字路にある店だから、人が良く通るし、何かイベントがあったりすればすぐ分かるよ」とのことだった。人が集まるがゆえに「情報の収集」という機能も自然と果たされているようだった。

（２）掛売りの過去と現在

個人請負経営になっている饒平名共同売店でも、掛売りは行われているのか聞くと、

よく行われているとの返事が返ってきた。そのため、都屋共同店同様、昔と今の掛売りのシステムのちがいについて、聞き取り調査を行った。饒平名共同売店の掛売りにおいての昔とは、正確な年代は分からないが、都屋共同店と同様、終戦直後から 1970 年代までとし、現在のシステムへ変わってきたのは、1980-90 年代からとする。

まず、昔についてであるが、店員は 50～60 代くらいであったため、聞き取りは周辺にいる 80 代くらいの方に行った。饒平名では、農業が主な職業であったため、都屋と同様、収入は安定せず、貧しかったそうだ。そのため、ほとんどの人が、購入するものの全額分を掛けで買っていたという。支払いは、給料日もしくは農産物の収穫時期である。この話をしてくれた方は、店の関係者ではなかったため、掛売り帳はどのようなもので、どのように記録していたかは、知ることが出来なかった。ここまでは、完璧と言っていいほど、都屋共同店の掛売りのシステムと一致している。

次に、現在の掛売りはどのように行われているかというと、人々の生活が昔に比べて豊かになったためか、掛買いをするのはいつも決まった人たちだという。しかし、決まった人たちとは言っても、少人数というわけでもないらしく、10 数人といったところだろうか。掛けをする金額は、全額であったり、足りない分だけであったり、その時々だそうだ。都屋共同店では、掛けをする金額が全額に及ぶ人はいなく、ここが一つの違いであると言える。また、ほとんどの人は給料日に支払いをするそうであるが、人によっては数日後、または数ヵ月後になることもあるそうだ。さらに、なかなか支払わない人もいるそうで、そのような場合は年末に一括請求をしているとのことだった。このように、支払いに関しても、都屋共同店とは大きく異なることが分かるであろう。それから、掛売り帳はどのようなものかと聞くと、レジの横にある、大きなホワイトボードを見せてくれた。饒平名共同売店の場合、帳面ではなく、この大きなホワイトボードに個人の掛売りの金額などを記録しているのだ。

また、公民館などの団体の掛売りについては、都屋共同店と同様、専用のノートがあり、それに記録していた。

写真 8　レジの横にある大きなホワイトボード

写真 9　饒平名公民館用の掛売り帳

６．呉我共同売店

（１）呉我共同売店の機能

呉我共同売店は、羽地内海付近の名護市にある集落だ。名護市内からは、バスで 20 分程度かかる。呉我共同店の前には広い道路が走っており、車どおりの多いところだった。実は、呉我共同売店は、３年前の 2005 年に個人経営化されていて、呉我共同売店という店の名前は、以前、共同売店であったときの名残だという。つまり、共同売店という規定からは外れてしまうのだが、他の２つの共同売店との共通点を見つけることが出来たため、対象から外さずに調査を行った。店員は若い女性で、昔のことは全く分からないということだった。そのため、昔の呉我共同売店の様子については、共同売店に詳しいという呉我区の区長さんにお話を伺った。

写真 10　呉我共同売店

現在の呉我共同売店に残っている、共同売店であった頃の名残は、店の名前だけかと思い、中に入ってみると、最初に紹介した都屋共同店と同じような光景を見ることが出来た。呉我共同売店では、日用品や食材を販売しているかたわら、食堂も経営しているのだが、店とつながる食堂のテーブルで、オバァがもやしの髭取りをしていたのだ。店員かと思い、声を掛けると、「今店員さん呼んでくるからね」と店員を連れてきてくれた。そのオバァは近所に住んでいて、暇になると買い物をするわけでもなく、ただ店に来るのだという。

車どおりが多いところに店があり、広い駐車スペースがあるためか、買い物に来る客は通りすがりの別の集落の人も多い。また、個人経営化されているということもあり、一見すると客とのつながりは薄そうに見え、一般的な個人商店のようにも見える。しかし、調査することによって、店と客との関わりが深いこと、共同売店の経営方法とは全く違うものの、ここでも、都屋共同店、饒平名共同売店と同じように、「人の集まる場所」としての機能は残っていることに気付いた。

（２）掛売りの過去と現在

個人経営になっている現在の呉我共同売店でも、掛売りのシステムが残っているのか不安だったが、掛売りは今も行われていた。まずは、昔の呉我共同売店に詳しい、区長さんから聞いた話である。呉我共同売店における昔とは、呉我共同売店のが出来た 1948 年から 2004 年まで､現在の掛売りのシステムに変わってきたのは個人経営になった 2005 年からとする。

呉我では、農業、もしくは稲作が盛んで、他の２つの共同売店と同じように、収入が安定せず、多くの人が貧しい生活を送っていた。その生活を支えていたのは呉我共同売店で、ほとんどの人が、買うもの全てを掛けで買っていたそうだ。支払いは、給料日か米や野菜の収穫時期で、掛売り帳は、都屋共同店のような、個人専用のノートがあったそうだが、こちらは複写式になっているものを用い、記録したものは、掛けをした本人と、店側がもつようになっていた。ここまでは、他の２つの共同売店とほとんど一致している。

現在、掛けをするのは決まった人２～３人で、掛買いをする金額は、買う物の全額分だそうだ。他の共同売店では、足りない分だけ掛け買いをする場合があったのだが、ここでは、足りない分だけ掛買いをするというのはないそうだ。支払いは、次の日の時もあれば、給料日の時もあるという。掛売り帳は、ひとつのノートに月単位で個人専用のページをつくり､記録していた。

写真 11　掛売り帳

７．分析・考察

（１）共同売店の機能

都屋共同店・饒平名共同売店・呉我共同売店は、それぞれ、集落直営型経営・個人請負型経営・個人商店と、経営の仕方は異なっていた。しかし、どの店も共同売店の機能として、共通するところがあった。それが共同売店だけではなく、共同売店から個人商店となった呉我共同売店にもあることは驚きであった。その機能としてあげられるもののひとつは、「人が集まる場所」ということである。

店の経営様式などが、時代の流れと共に変化して行き、顔なじみの店員などがいなくなってしまうことは、どの店においてもあることだし、仕方のないことである。しかし、少なくとも今回私が調査した３つの店においては、その時代の流れによって、店が変わってしまっても、店自体に対する客の意識は変わっていなかったのだろう。そのために､「人が集まる場所」という店の機能は、客によって維持されてきたのではないだろうか。現在の呉我共同売店の店員は、共同売店であった頃の呉我共同売店を

知らないが、今もなお、共同売店であった頃のように、買い物という枠組みを越えて人々が来るということが、このことを裏付けているように思う。

また、人々がそこまで「人が集まる場所」を欲しているということから、その機能がどれほど人々の生活に必要なものだったか、また、共同売店というものが、集落の人々にとってどんなに重要な役割を果たしていたかが想像できる。

（２）掛売り

次に共同売店のもうひとつの重要な機能である掛売りについて考察する。

３つの共同売店の掛売りのシステムの変遷を、表１～３にまとめる。

表１　都屋共同店

	終戦直後～1970 年代	1980-90 年代～現在
掛けをする人	ほとんど全員	決まった少人数
掛けをする金額	全額	足りない分だけ
支払い	給料日か大漁の日（１ヵ月後）	ほぼ翌日（１日後）
掛売り帳	本人専用のノート	ちらし等の裏に全員分まとめて記録（団体は専用ノートあり）

表２　饒平名共同売店

	終戦直後～1970 年代	1980-90 年代～現在
掛けをする人	ほとんど全員	決まった複数人
掛けをする金額	全額	全額・足りない分だけ
支払い	給料日か収穫時期（１ヵ月後）	数日後・数ヵ月後・年末
掛売り帳		ホワイトボード（団体は専用ノートあり）

表３　呉我共同売店

	1948～2004 年	2005 年～現在
掛けをする人	ほとんど全員	決まった人２～３人
掛けをする金額	全額	全額
支払い	給料日か収穫時期（１ヵ月後）	翌日・給料日
掛売り帳	個人専用ノート（複写式）	１つのノートに個人専用ページを月ごとに作り、記録

３つの共同売店の掛売りのシステムを比べてみると、昔についてはさほど違いはないのに、現在では大きな違いがあることが分かる。また、掛けをする人、その金額、

支払いに注目すると、集落直営型経営の都屋共同店より、個人請負型経営になっている饒平名共同売店、または個人経営の呉我共同売店のほうが、昔に近い形で残っているように思える。このことから、掛売りのシステムは、集落直営型経営だから、より昔に近い形で残っている。などというような、安直な考えで説明できるものではないと言える。私は、掛売りの変化について、その集落の経済状況がどのようになっているか、掛けを必要とする人がどのくらいいるかによって、掛売りのシステムは変わってきたのではないかと推測する。

８．おわりに

今回、どの店でも言われたのが、「スーパーやコンビニにお客さんをとられる」ということだった。車の普及と共にスーパーなどの大型店舗が進出し、人々は安さと品物の豊富さに惹かれて足を伸ばす。しかし、それでも集落には共同売店を必要とする人がいて、厳しい経営状況にありながらも、なんとか維持しているところが少なくない。集落という狭い範囲内で、その中心にあった共同売店は、存在するときには気付かないが、失って初めてその大切さに気付く、空気のような存在なのだという。

そして、共同売店がなくなることは、村落共同体の要所を失うことに等しく、そのために共同売店を守っていこうという意識が強いのではないだろうか。つまり、共同売店では、他の店舗にはない存在理由があるのである。共同売店に求められているものが「購買活動」だけであるならば、スーパーには到底及ばない。しかし、共同売店には、前述したような「人々が集まる場所」という機能や、「掛売り」という、店と客との信頼がなければ成り立たない機能が存在する。それらが集落内のあらゆるものを結び付けていて、集落にとって欠かせないものだとすれば、スーパーなどの大型店舗が主流の現在であっても、それだけで存続する意味は十分である。

参考文献

金城一雄（2003）「共同店の歴史展開と現状」『沖縄大学地域研究所所報』29
堂前亮平（1997）「沖縄の伝統的商業空間」『沖縄の都市空間』古今書院
宮城能彦（2003）「村落と共同店」『沖縄大学地域研究所所報』29

参考ウェブサイト

「共同売店ファンクラブ　オフィシャルブログ」　http://kyoudoubaiten.ti-da.net/